

保育実習における実習日誌の記述内容と実習成績との関連 — 学生自身による日誌の内容分析学習を通して —

Relationship between described contents of daily records and evaluated score in childcare practicum training

権 藤 眞 織

Maori Gondo

はじめに

少子化が社会問題として取り上げられて久しいが、少子化や核家族問題で保育士に対するニーズは多様化・複雑化し、従来の「保育に欠ける乳幼児の保育」に加えて、子育て支援や地域交流、地域の活性化など、一層専門的かつ幅の広い技能が求められるようになってきた。このような多様なニーズにこたえられる保育士を輩出することが、全国で400校にもおよぶ養成校に求められている。一方で、高度な専門性を養成することが期待される養成の現場では、学生の変質に危機感が感じられているのも現状ではなかろうか。授業中の私語や居眠り、携帯の使用、また、基礎学力の低下、社会的マナーや常識に対する感覚のずれ、対人関係場面での不適応など、従来の保育学生に見られなかった問題が頻発してきている。保育の専門性を教育する以前に、前提となる学習課題をまずクリアすることが、養成課程での主な取り組みになってしまっていると嘆く教職員も少なくない。

多様なニーズに対応しうる高度な専門性と学生の抱える基礎的な課題という両側面で、教育的な成果を挙げていくためには、より効果的な教育プログラムや教材の開発が必要である。保育士養成カリキュラムにおいて現場で体験から学ぶ実習の位置づけは大きく、平成14年からは実習期間がさらに2週間拡大された。近年、標準化された養成教育システムの開発が進められ、平成17年に「保育実習指導のミニマムスタンダード」が全国保育士養成協議会により策定された。こうして、実習の教育内容や評価に関しても、標準化された教授内容や評価基準が示された。しかし、実習および実習指導に関してより高い教育効果をあげる教育プログラムや教材開発をおこなうに足る、基礎的研究や実践的研究はまだあまり多くは見られない。

養成現場の今日の課題として、学生の変質をあげたが、近年、保育学生たちが、実習に大きな不安やストレスを抱えるようになってきた¹⁻²⁾。子どもや職員とのかかわりなど人間関係に起因するものも不安の対象となっているが、「実習日誌を書くこと」も大きなストレスになっている。養

成課程のテキストの中でも、実習日誌の記述のみを取り扱ったテキストも複数出版されているが、実習巡回の折に実習施設の指導者から実習日誌に関して不十分であるとの指摘を受けることも少なくないのが現状である。

実習日誌を書くことについて学生の学習活動をおってみると、「書き方」や「書くべき内容」、「書く際の注意事項」について座学を中心に授業やテキストなどから学び、その後、実習に入って実際に現場で「書く」ことになる。文章力を上げるためには、文章を書くことはもちろん、読むことも必要であるが、学生が「書かれた実習日誌を読む」チャンスは、自分の書いたノートとテキストなどで例示されている模範例数例というのが通常である。一方、実習施設や養成校の指導者は、数名から数十名あるいは数百名の実習日誌を読んでおり、どのような記述が良いか比較検討の経験を持つことができる。この観点から考えると、特に養成校の実習担当教員は最も実習日誌について“学習”しているのかもしれない。「実習日誌を読む」チャンスを増やすことを目的に、筆者は事後学習で実習ノートを互いに読みあうことを学生に提案したが、かなり抵抗感を示す学生が多数おり、教育実践として実施することが困難なケースも多々あった。このような現状から、学生は、他者と比較検討しながら、自分の日誌を客観的にみるチャンスが圧倒的に少ないといえよう。

そこで、筆者は、実習の事後学習で実証科学における質的研究法の手法を取り入れた教育実践を試みた。実習日誌の記述内容をカテゴリに分類し、カテゴリごとの出現率として数量化することで、客観的に自分の日誌を捉えなおすことを試みた。その結果、ほとんどの学生が“初めて”自分の記述傾向を知り、自分の記述傾向で不足している部分を次からの目標にして日誌を書けばよいという、自分なりの目標を明確に持てたようであった。また、学生の名前を伏せて、各自の記述傾向を示したグラフを紹介することで、多数の他者との比較も可能となった。

本研究では、上記の教育実践で得られた結果をもとに、実習日誌の記述内容の傾向を検討した。また、実習の評価と記述内容との関連についても探索的に検討を行った。

目 的

実習事後学習の一環として行った実習日誌の分析活動の結果を集約し、「日々の記録」の感想や振り返りの部分における記述傾向を検討する。

保育所実習の施設評価ならびに養成校の総合評価と、実習日誌の記述傾向との関連を検討する。

方 法

1. 対 象 者

福祉系のY専門学校2年生、34名が参加。著しくカテゴリに誤解のある者、未提出者を除いた結果、分析対象者は25名となった(F:M=14:11)。実習経験は、1年次夏季に児童館実習(2週間)、1年次春季に保育所実習(10日間)であった。

2. 教育実践

Y専門学校における保育実習Ⅰ（保育所）の事後学習ならびに保育実習Ⅱの事前学習としての位置づけで、集団一斉授業の形式で行った。保育実習Ⅱにむけて日誌の記述力を向上させるために、「実習日誌の書き方を上達させる」というテーマで、自分が書いた実習日誌を教材として取り上げ、日誌の記述内容を振り返った。授業は、①活動のねらい・方法について：1コマ、②日誌の分析：1コマ、③結果のフィードバック：1コマの計3コマ分を行った。

Table 1 記述内容に関するカテゴリと内容

カテゴリ	内 容
A：子ども	子どもに関する事柄が書かれている
B：保育士	保育士に関する事柄が書かれている
C：実習生	実習生（自分自身）に関する事柄が書かれている
D：保育	保育理念や保育の方法など『保育』に関する事柄が書かれている
E：その他	A～Dにあてはまらない事柄（天気など一般的な状況など）について書かれている

手順の教示では、まず、1年次春季の保育所の実習時の日誌、全実習期間（10日間）を、前期・中期・後期に分け、各時期毎に1日分の日誌を選び、一人につき計3日分の日誌を分析の対象として抽出することを伝えた。実習日誌に取り上げられる主な内容をカテゴリとして示し、例に従ってカテゴリに対応したコードを分析シートに記入するよう教示した。その際、少人数のグループになり、お互いに日誌を読みあったり、カテゴリを確認するなどグループワークを行った。分類が終了したグループから、分析シートを提出した。後日、担当者より各カテゴリの出現頻度をグラフ化したものを配布し、解説した。

3. 分析方法

記述文を意味のまとまりのある句読点毎に1ユニットとして区切り、各ユニットをカテゴリに分類した。まず、最初の分類カテゴリとして、記述文が客観的な事実について書かれたものであるか、主観的な考察部分について書かれたものであるかを分類した。次に、内容的な分類カテゴリとして、子どものこと・保育士のこと・実習生のこと、保育全般・その他(状況)の5つを設定した(Table 1)。また、事実の記録部分（客観的な記述）と考察の記述部分（主観的な記述部分）それぞれに、下位カテゴリを設けた（Table 2）。事実の記録部分（客観的な記述）では、1-1：子どもの発達、1-2：子どもの個性、1-3：子どもの感情、1-4：1～3以外の子どもの行動、2-1：保育士と子どものかかわり、2-2：保育士の保育技術、2-3：その他の保育士のこと、3-1：実習生と子どものかかわり、3-2：実習生の保育技術、3-3：その他の実習生のこと、4：保育全般について、5：その他（状況など）についてであった。考察の記述部分（主観的な記述部分）では、1：反省・振り返り、2：原因・理由、3：対策・展望、4：理解・解釈、5：主張・思い、6：状況把握、7：感想、8：1～7に分類されないその他であった³⁾。

4. 実習評価

実習カリキュラムでは、保育所職員からの評価ならびに養成校担当教員からの評価を総合して単位認定がなされる。施設および養成校の実習評価と、評価票の個別項目の実習日誌に関する評価項目での評価を収集した。成績は優・良・可・不可の4段階評価であった。実習日誌の記述内容と評価との関連を検討する際には、優・良評価を高成績群 (High)、可・不可評価を低成績群 (Low) とした。

Table 2 客観的および主観的記述内容の下位カテゴリと内容

客観的記述内容 (実習場面での「事実」に関する記述)		主観的記述内容 (感じたこと・考えたことなど「考察」部分)	
1-1: 子どもの発達	子どもの発達や育ちについて	1: 反省・振り返り	自分の実践についての反省・振り返り
1-2: 子どもの個性	子どもの性格や個性について	2: 原因・理由	子どもや保育士、実習生の行動や状況の原因や理由
1-3: 子どもの感情	子どもの気持ちや感情について	3: 対策・展望	今後の実践に対する取り組み、対策など
1-4: 子どもの行動	上記以外の子どもに関する事柄	4: 理解・解釈	子どもや保育士、実習生の行動や状況についてわかったことや考えたこと
2-1: 保育士のかかわり	保育士と子どものかかわりについて	5: 主張・思い	自分の実践や子ども、保育についての自分の考えや思い
2-2: 保育士の保育技術	保育士の保育実技や生活支援技術について	6: 状況把握	実習場面での出来事を自分なりに捉らえなおし
2-3: その他の保育士のこと	上記以外の保育士の行動について	7: 感想	実習場面での出来事について感じたこと
3-1: 実習生のかかわり	実習生と子どものかかわりについて	8: その他	上記に分類されない考察
3-2: 実習生の保育技術	実習生の保育実技や生活支援技術について		
3-3: その他の実習生のこと	上記以外の実習生に関する事柄		
4: 保育全般について	保育方法や保育の考え方などについて書かれている		
5: その他 (状況など)	上記に分類されない事柄		

結 果

1. 客観的記述と主観的記述の比較

客観的記述（客観）と主観的記述（主観）では、平均出現数が客観：16.28件（43.95%）、主観が18.56件（50.11%）と、全体的な傾向としてはどちらかに偏らずバランスよく書かれていることが示された。しかし、学生間ではばらつきがみられ、事実の客観的な記述の多いタイプと、自分の思いや考えなどを多く書くタイプがあった（客観の最小出現数：3件（13.6%）、最大出現数：35件（65.4%）、標準偏差：15）。

2. 記述内容の傾向

各カテゴリ別の出現頻度では、カテゴリ間に出現頻度における偏りが見られた（Fig.1）。子どもについての記述が最も多く、42.6%であった。次いで実習生自身についての記述が多く、27.2%であった。3番目は、保育全般についての記述で、11.5%となり、現場で観察して学ぶべき対象である保育士についての記述が最も少なかった（4.63%）。総記述ユニット数はあまり個人差は認められなかったが（M=37、SD=12）、各カテゴリでは個人差が大きなものとなっていた（子ども：M=16、SD=9.3／実習生：M=9.5、SD=5.3）。

次に、下位カテゴリの出現傾向は、客観的な事実の記述では、子どもの行動が最も多く、18.44%であった。次いで発達（12.91%）や子どもの気持ち（12.7%）に関する記述が多かった（Table 3）。3番目に、保育士のかかわり：9.84%、実習生のかかわり：9.02%となった。一方、実習場面で体験的に学んでいる保育技術に関しては、手本として観察すべき保育士の保育技術が2.56%、自分の実践として振り返り、確認すべき自分自身の保育技術が2.66%と子どもに関する記述の6分の1から4分の1しか見られなかった。

主観的な記述については、感想が最も多く、30.81%であった。次いで、理解・解釈が19.09%、主張・思いの15.69%、反省・振り返りの14.74%となった。考察の仕方として、より深く、考えを発展させている対策・展望（9.83%）や原因・理由（2.46%）は比較的出现率が低かった。

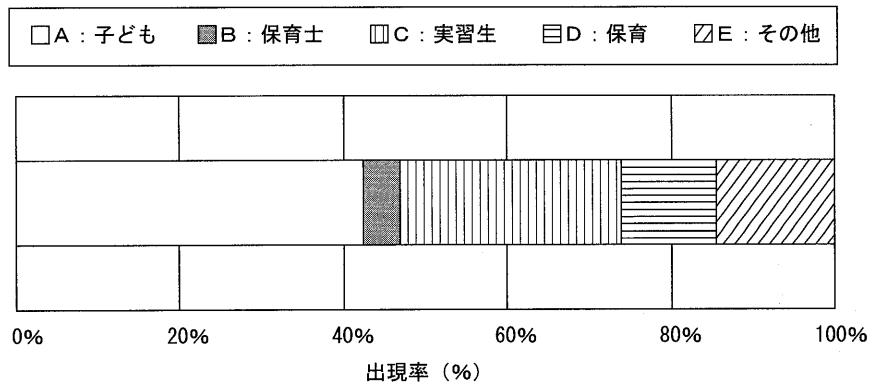


Fig.1 実習ノート記載内容のカテゴリ別出現率

3. 実習評価との関連

各カテゴリの出現傾向と実習および実習日誌の成績との関連を検討した結果、下位カテゴリによって関連が見られたものもあった (Table 3)。施設評価と学校評価の両方で、客観的記述の子どもの行動に関する記載が多いほうが成績がよい傾向が見られた。施設評価では、客観的記述の保育士と子どものかかわり、ならびに主観的記述の状況把握の記述量が多い学生の成績が良い傾向が示された。一方、学校評価では、実習生と子どもとのかかわりについての記述が多いほうが成績が良い傾向が見られた。

そこで、高成績群 (High: 優・良評価) と低成績群 (Low: 可評価) にわけて検討した結果、統計的には有意ではなかったが、グラフ上では一貫した傾向が見られた (Fig. 2: 施設の指導者の評価: High=15、Low=8、および Fig. 3: 養成校教員の評価: High=19、Low=4)。施設の職員の評価では、子どもの記述、保育士の記述、状況の把握のすべてで、成績の良い学生は記述量が多かった。

Table 3 下位カテゴリ別出現頻度および成績との相関

客観的記述内容	%	成績との相関 (r 値)
1-1: 子どもの発達	12.91	
1-2: 子どもの個性	6.56	
1-3: 子どもの感情	12.7	
1-4: 子どもの行動	18.44	.418(施設)*.432(学校)*
2-1: 保育士のかかわり	9.84	.439(施設)*
2-2: 保育士の保育技術	2.66	
2-3: その他の保育士のこと	2.25	
3-1: 実習生のかかわり	9.02	.485(学校)*
3-2: 実習生の保育技術	2.66	
3-3: その他の実習生のこと	1.43	
4: 保育全般について	7.38	
5: その他(状況など)	14.14	
total	100	
主観的記述内容		
1: 反省・振り返り	14.74	
2: 原因・理由	2.46	
3: 対策・展望	9.83	
4: 理解・解釈	19.09	
5: 主張・思い	15.69	
6: 状況把握	4.16	.398(施設)*
7: 感想	30.81	
8: その他	3.21	
total	100	

*: $P < .005$

考 察

1. 客観的記述と主観的記述について

客観的記述と主観的記述のバランスについて検討した結果、全体的にはバランスが取れた状態であったが、個人差が大きく、事実の客観的な記述の多いタイプと、自分の思いや考えなどを多く書くタイプが見られた。なぜ、このような個人差が生じるのかは今回の実践ではわからないが、実習

期間中の3日間のみでの分析であったので、少なくとも分析日数を増やして検討することが必要である。また、実習日誌は、実習中の出来事に大きな影響を受けるので、実習期間中の保育内容や実習プログラムなどとも合わせて検討する必要がある。教育実践では、各学生に結果をフィードバックした際に、このような視点で自分の日誌を見直す機会が今までになかったので、一様に新鮮な受け取り方をしていた。従来の事前学習から、テキストなどにも「事実とそれに基づいた考察をバランスよく書く」と解説されており、それを学んできたが、自分たちの結果を数量化して捉えることで、実感として感じられた様子だった。特に、極端に偏りの見られた学生は、事実とそれに基づいた考察をバランスよく書くという具体的な目標を持つことができたようだ。

2. 記述内容の傾向について

内容的に異なる5つの分類カテゴリ（子どものこと・保育士のこと・実習生のこと、保育全般・その他（状況））では、各カテゴリ別の出現頻度に偏りが見られた。子どもについての記述が最も多く、ついで実習生自身についての記述となり、保育士についての記述が最も少なかった。記述内容の出現傾向も個人差が大きかった。子どもの実態について学ぶことは、保育実習の課題のひとつであるので、その課題には取り組んでいることがわかる。一方、保育士に関する記述が極端に少ないことから、現場で見て学ぶべき職員の動きを捉えられていない可能性も考えられる。しかし、実習場面では先生の動きを丁寧に見学するよりも、自分自身も先生と平行して動くことも多いため、物理的に先生を観察する時間が少ない可能性も考えられる。前述のように、実習場面や状況によって、実習日誌の記述内容は大きく影響を受けるので、各実習日の出来事などとの関連も検討する必要がある。

次に、下位カテゴリの出現傾向においても、客観的記述では子どもに関する記述が最も多く、発達や気持ちなども記述されていた。子どもに関しては、発達の側面や個人の気持ちなどの個々の状態も観察・記録できていることがわかる。しかし、表面的な子どもの行動や様子の出現率の方が約2倍以上多いことから、初めての保育所実習では、発達や子どもの内面などを細かく観察・記録するのは困難であったようだ。子どもの記述に次いで、保育士と子どものかかわりと、実習生と子どものかかわりが多くみられたが、このことから、実習生の主たる興味関心が子どもとのかかわりで

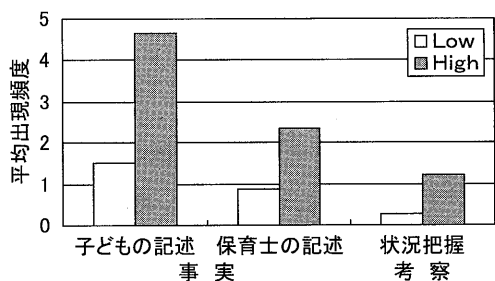


Fig.2 施設評価別下位カテゴリ出現頻度の比較

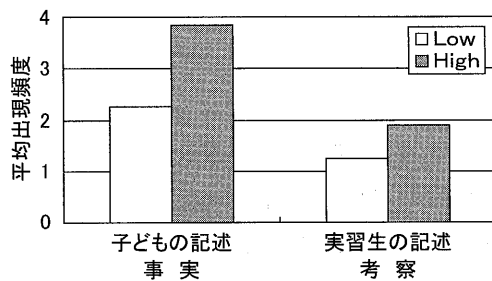


Fig.3 養成校評価別下位カテゴリ出現頻度の比較

あることがわかる。保育士についての記述が低かったが、子どもとかかわる場面については比較的観察・記録ができていたといえる。

主観的な記述については、感想が最も多かったが、養成の現場では実習の度に施設の指導者からの指摘が実証された形になったといえよう。つまり、「考察が浅い」、「表面的な印象の羅列になっている」、「日記のような状態になっている」とのご指摘である。保育の現場でさまざまに感じ、感性を磨くことも大切な学習のひとつであるといえるので、感想が不適切であるというわけではない。しかし、表層的な感想から、より深い考察へと言及していけるよう学習を積み上げることが必要である。今回の分析では、感想からどのような考察へと結びついているのか、あるいは、感想を書いただけで考察は深まっていないのかは明らかにすることができない。今後は、考察がどのように深まっているのか、考察の各カテゴリ間に関連性は見られるのか検討していく必要がある。また、保育実習Ⅰから保育実習Ⅱにかけて、経験を積み上げていくことで、考察内容が変化するのも検討する必要がある。

3. 実習評価との関連について

最後に、各カテゴリの出現傾向と実習および実習日誌の成績との関連では、カテゴリによって関連が見られたものがあつた。特に、子どもの行動に関する記述では、施設評価と学校評価の両方で、記述量が多いほうが成績がよい傾向が見られた。子どもをよく観察して、記録できることは、実習で学ぶべき観点として重視されていることがわかる。また、施設評価では、保育士と子どものかわりについての記述量が多い学生の成績が良い傾向が示され、保育士は職員の様子や動きを観察・記録できることを重視しているといえる。一方、学校評価では、実習生と子どものかかわりについての記述が多いほうが成績が良い傾向が見られ、実習生自身について考察を行うことが評価される傾向があることが示された。

保育所の現場指導者と養成校の教員では、評価の観点に類似点と相違点が見られ、保育現場では子どもと保育士をよく見て捉えられているか、養成校では自分自身の振り返りや反省がなされているかが評価の観点として重視されていることが示唆されよう。今回は教育実践として授業の中で行った分析であったため、カテゴリの分類や出現率など信頼性に懸念される部分があるため、一つの方向性としての考察にとどめ、今後、今回の探索的な実践研究を元に、基礎的なデータを収集、検討する必要がある。

おわりに

保育実習Ⅰ（保育所）の事後学習および保育実習Ⅱの事前学習の一環として、実習日誌の記述力の向上を目指して実証科学的な質的研究の分析方法を導入して授業実践を行った。実践場面での学生の様子からは、実習日誌を振り返り、客観的に自分の日誌を捉える教育プログラムとしての可能性が感じられた。また、実践から得られた分析結果から、データの信頼性には課題があることを念頭に置いて、①全体傾向として、実習日誌に記載される内容に偏りが見られたこと、②記述傾向に

は個人差が大きいこと、③記述傾向と実習評価との関連性がみられたことなどが示された。また、④保育所の指導者と養成校の教員とでは、評価の観点に類似点と相違点が見出された。

実習日誌は、卒業後も学生たちが参考にする、いわば「自作の教材」であるといえる。実習日誌を書くこと、再び読み直すことによる教育効果は大きい。実習指導カリキュラムにおいても、丁寧に学習を積み上げることで、学生の学習成果を大きく飛躍させる可能性のある教材であるといえる。

今後、施設実習や保育実習、ならびに幼稚園実習など、学生は複数の実習を経験するので、実習間の連携の効果⁴⁾を検討したり、実習場面で体験される出来事に着目し、日誌に記録された事例の分析を丁寧に行うなど、事例研究の効果⁵⁾も組み込むことで、教育実践研究として展開し、かつ、その学習効果を測定し、保育士養成の一助としたい。

引用・参考文献

- 1) 音山若穂, 児童福祉施設実習生の心理的ストレス反応の変化と自己評価, 刺激事態の検討, 保育士養成研究, 19, 15-27, 2001.
- 2) 村田務, 岡本美智子, 小林義郎, 保育実習への不安状況に関する調査, 白梅学園短期大学教育・福祉研究センター年報, 9, 13-31, 2004.
- 3) 藤原明子, 保育所実習における実習ノート自己分析の試み—自分自身の『気づき』の対象と深さを知る—, 教育心理学会第46会大会発表論文集, 46, 2004.
- 4) 松崎洋子, 三溝千景, 高嶋景子, 保育士養成における保育所実習と教育実習の連携, 保育士養成研究, 21, 37-45, 2003.
- 5) 金子智栄子, 現職保育士研修における事例研究の有効性—保育士の認識の変化と乳幼児の行動変容との関連性—, 保育士養成研究, 19, 29-34, 2001.

